成人映画

10

成人映画・目次　第1巻第3号　10月号

■カラー・ピン・アップ■

ぬうど／桂　奈美

■グラビア・スコープ■

女優／新高恵子のセクシーポーズ……………15

「ゴールデンハンター」の美女たち……………21

■グラビア特集■

今月のスクリーン・エロティシズム集……………3～6 31～34

―新作17本を一挙にグラフで紹介―

■読みもの■

特集／諸作家のピンク映画観を斬る……………7

ロケ・ルポルタージュ……………川島信子……………10

セクシー女優のシヤワー・シーン勤務評定……………12

クローズ・アップ／扇町京子を訪ねて……………26

ピンク映画みたまま……………佐藤重臣……………27

シネマＹ談……………28

そのときマバタキしないで……………和田正夫……………29

新作映画の内容紹介……………23

■マンガ■

ボクのシネ散歩……………やなせ・たかし

新高恵子　P. 15

坂樹まゆみ　P. 32

内田高子　P. 33

表紙／緑　魔子

東映「２匹の牝犬」でデビュー。ブルーリボン新人賞。米「ＬＯＯＫ」誌の表紙になる。「鎖の牝犬」に出演中。

ピン・アップ／桂奈美

「漫画読本」のピンアップでみとめられ「女の林」「漁色」などに主演。日劇ミュージックホールの舞台にも進出。十九才。本誌特写。

桂 奈美

ボクのシネ散歩

「ある愛の終りに…」ロケ・ルポ

やなせ・たかし

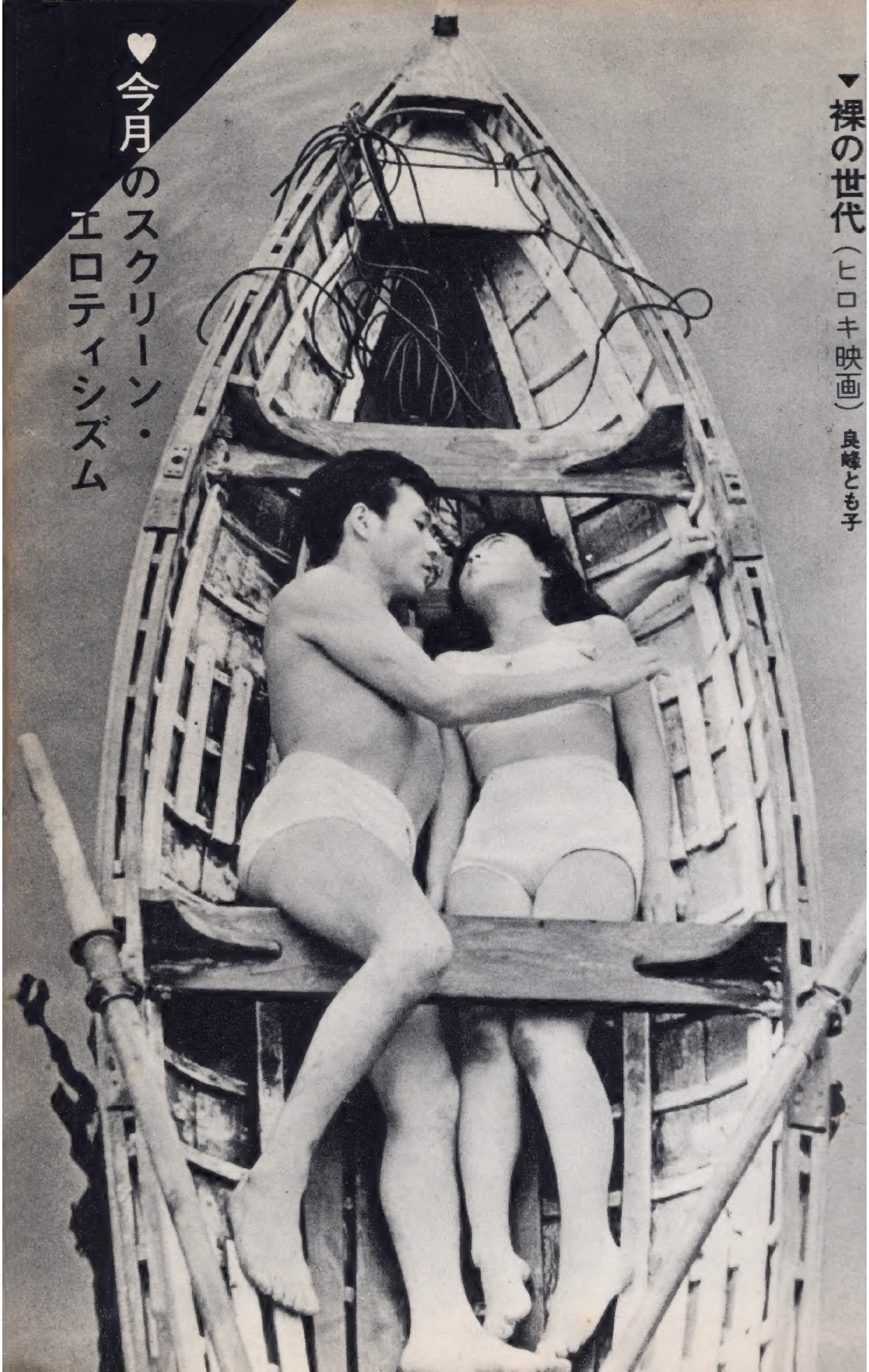
江の島のIホテルの日本間の一室で、もう既に撮影ははじまっていました。

女主人公の新高恵子さんが、佐伯秀男さんの会長におかされるクライマックスシーンです。想像はしていましたが、なかなか大変な仕事です。女優さんの身体にはところどころ痛々しい内出血のあとがみえます。誰がニタニタしながらこの光景を眺めることができるでしょうか、佐伯秀男さんは往年の二枚目スターであるだけにグッと貫録があります。

監督の新藤孝衛さんは小柄ですが、エネルギッシュでファイターです。テキパキとさばいていきます。中年の男が若い女にのしかかっていく演出なんてものはビシリビシリとやらないと全体にフヤケたものになります。剣劇映画におけるチャンバラシーンの如く、西部劇における対決シーンの如く、全篇のクライマックスでありますから、若い女優さんの裸の身体が、格斗の為にタタミずれをおこそうとも、同情しているヒマはないのです。

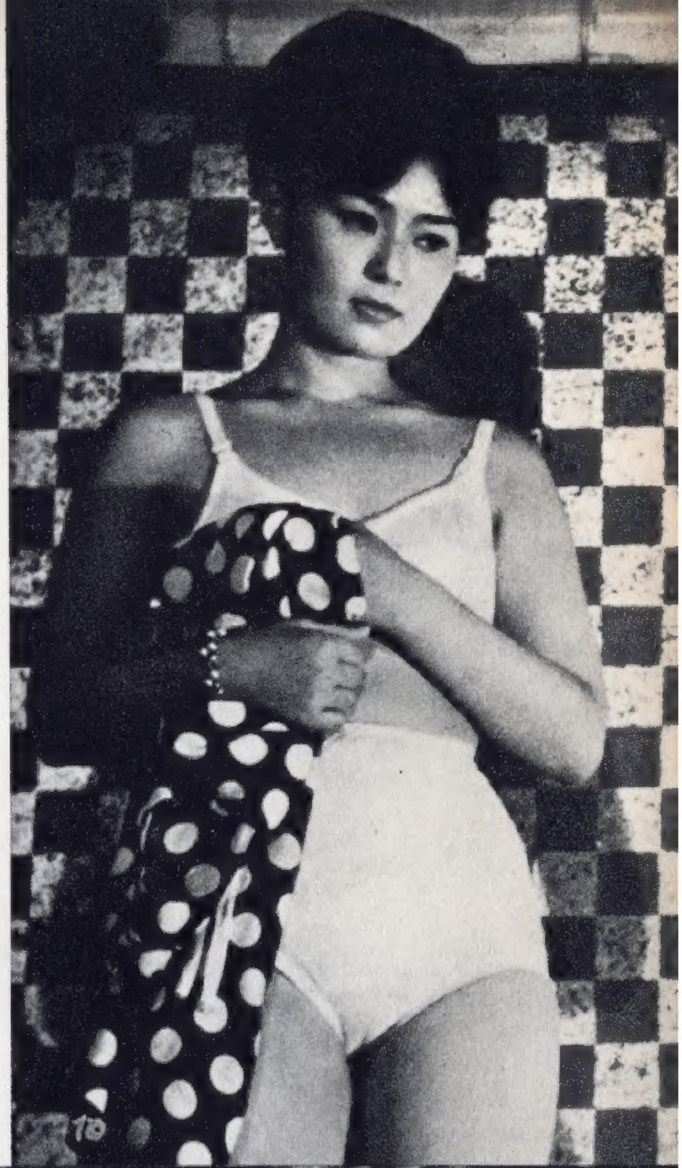
エロダクションという名のひびきはあんまりよくはないけれど、本当に成人の鑑賞に耐えるエロチックな映画がもしできたとすればそれはすごくいいことだと思いますね。

♥今月のスクリーン・エロティシズム



▼裸の世代（ヒロキ映画）　良峰とも子

▶**狂った本能**（関東ムービー）
坂樹まゆみ



▲**四つの乳房**（日本シネマ）藤田恵子

▲**青い悦楽**（映画芸術協会）露原悦子

▲乳ぼくろ（関東ムービー） 内田高子

▶憎い肌（ヒロキ映画） 内田高子

▼素肌の叫び（明光セレクト） 谷口朱里

▲痴情の密漁（大蔵映画）　美矢かほる

諸作家のピンク映画観を斬る

最近は著名な作家や、評論家の先生方をわずらわした〝ピンク映画拝見記〟が、よく各誌の紙面をにぎわしている。そこでここでは、諸作家はどんな見方をしているか、そのルポ記事をマナイタにのせてみることにした。

■もの足らぬ宇能氏

「サンデー毎日」(8月8日号)で作家宇能鴻一郎氏に、〝現代をえぐるシリーズ〟を書かせている。〝「性」この虚妄の救い〟というかなり観念的?なタイトル。「不倫」などセックスをテーマに大胆な小説を書いてきている宇能氏がエロダクションの現況を報告している。

「エロダクション作品は着実なヒットをつづけ、不況にあえぐホテル業界をしりめに連れ込み宿が満員の盛況だ、という現象もまた事実らしい。この二点にしぼって不景気における日本人の性行動を端的にさぐってみよう」というのがルポのねらいだ。つまりホテルの不況は邦画五社で、連れ込み宿の盛況はエロダクションだという。まことにうがった見方である。セックス映画と性行動との結びつけなどかなり飛躍的だが、アフレコ女優のあえぎ、うめき声のセクシーな模様、場末の映画館に出かけて行き、客席の状況

「例の万国共通の見世場にくると客も身をのり出し、画面から何も見落とすまいとする姿勢になる。しかし終り近くなると、身ののり出し方もだれて少なくなってゆく。こんな映画をみてオバチャマ族が抗議にでかけるのは、現代では彼女たちだけが、かくもささいな刺戟にも十分に性的緊張を感ずることのできる敏感さの持ち主だという証拠で、まことにうらやましい次第である」

と批判する。オバチャマ批判をもっと痛烈にやってほしいのだが、いささかものたりない。さらに映画館の情景描写では、ベッドシーンで目をさまし、身をのり出しているさまなどの心理をついている。

結論は〝性的緊張〟の表現と、観客との違和感をあげて技術だけでない何かの根本的な原因があるのではないか?

各誌にのったピンク映画ルポ記事

という。宇能氏のこのルポは〝性的緊張〟の度合いをたびたび引き合いに出しているが彼自身、緊張の度合いは稀薄に感じたらしい。

■ユニークな森氏

「宝石」（10月創刊号）で評論家森秀人氏が「日本映画はエロダクションで引き受けた！」というすさまじいレポートを書いている。ロケ、製作度、監督、映倫、評論家に会ってまとめている。

二十七才の青年監督向井寛氏に会って「オールロケで短期間撮影が条件、俳優もかわいそうだが監督もつらい。このつらさに負けないでやってゆけるのは、わたしたちの若さと情熱です。せめて五百万円の製作資金と、一カ月の撮影期間さえあれば五社に負けないんですが」という話をきき、森氏は非組織の自由の中で、一匹狼として活躍したいというこの青年監督の顔は意外に明るく、若いピンク映画の監督たちはみんな好感のもてる青年ばかり、このあたりにも若いピンク映画の可能性が散見できる。老化した五社と若いピンク映画の対決なのだと、ピンク映画の若手に期待をかけている。

さらに若松孝二監督をとらえて「おなじ苦労するなら生きているという意味のわかる苦労がしたかった、それでテレビの仕事で弁当運びや使い走りをやり、映画監督になった」というバイタリティをきき、二年間に二十四本も演出し、「壁の中の秘事」で〝国辱映画〟とさわがれた真相にまでおよぶ。映画は誰でも作れる時代になったのだ。新しい映画運動の開花であり、日本文化自体の焦点でもあると結んでいる。現代の状況を足で取材し、たしかな目でとらえたユニークなルポである。

■老化センセイ奥野氏

「小説現代」（10月号）は奥野信太郎氏の〝おんな文明抄〟「ピンク映画の女優たち」。内田高子、谷口朱里、松井康子、森まこのグラビアがあり奥野氏はかなり、オーソドックスな筆法で、春画や「あぶな絵」まで引用している。ベッドシーン撮影の模様も「若い男が脱ぎっぷり第一の評判高い内田高子のネグリジェの裾をまくりあげ、豊満なシリの肉をなでまわしながら、次第に急所の方にのびてゆく。ここが何度もやりなおしになるが……よくよく因果な稼業だと思わないわけにはいかなかった」

奥野センセイはここで、女優にかなり同情をしている。古いレディファーストの面目にかけたのか。この種の映画を〝好色映画〟と呼び、二、三本みての感想も――

「たとえば〝情事の履歴書〟という映画は、同じ描述主義の粗製作品ながら、ストーリーの構成や撮影にも、かなり工夫をこらしたことは十分わかる。やはり眼目とするところは性交場面の挿入にほかならない。それがあまりにも必然性がなく、その露悪的な醜悪な男女性交がいたずらに空転しているのを、じっと眺めていなければならないことのわびしさ。映画製作の合理化大衆にもっともアピールするものと豪語しても、〝下手物〟は依然として下手物である」といまさらのように啞然として、困ったものときめつけている。

「あぶな絵」「好色映画」とか、「下手物」としか理解できないあたりは、実に古い観念で恐れ入った次第。なにが〝おんな文明抄〟なのか。ピンク女優たちの体験談を例記したところに、奥野センセイの老化現象と、助平爺いさんらしい面目が躍如としている。つまり、あくまでもピンク映画を〝下手物映画〟とし

〝アサヒグラフ〟の特集グラフ

かみていない。さきの森秀人氏が〝ピンク映画の発展と可能性〟を探究したのにくらべると、進歩派と老化派のルポ記事の現象がハッキリあらわれているとみた。

■衰退をつくアサヒ

グラフ雑誌の伝統を誇る「アサヒグラフ」（8月27日号）で「衰退の中の花盛り」――客をよぶピンクプロ作品――を扱っている。

この号は「どん底・日本映画」の特集で、どん底のなかで繁盛している現実をとらえている。グラビアは若松孝二監督の「歪んだ関係」の撮影風景。ピンク映画専門館が主催したピンク女優撮影会、ピンクプロの会社、「裸の女王（ヌギマスワヨ）」で、牧和子、香取環、内田高子、可能かづ子、橘桂子、谷口朱里、城山路子の六人の全身（全裸ではない）を紹介し、裸の弁をのせている。

ここでも若松孝二監督の勇ましい〝セックスのもつドラマ性の追求〟の発言があり、いまや週刊誌、新聞とピンク映画での若松監督は〝スター〟扱いである。

グラフが「いくらあたるといっても、ピンク映画に限界はあるだろう。だが、現在のピンクプロの繁栄ぶりが五社映画の衰退の裏側にあるということは見逃せない。五社というワクの中でぬくぬくとすごしてきた日本映画が、退潮のさなかに生んだ奇形児ともいえるのではなかろうか。いずれにせよ、日本映画の現状に警鐘を与える存在になっていることはまちがいない」と論評を下している。

奇形児であるか、正常児であるかは別として、いままでぬくぬくとひとりいい子で生きてきた奴にパンチをくらわせているのがピンク映画の存在であることはたしかなことだろう。

●ロケ・ルポルタージュ

高原と清流に展開される ハダカ撮影をのぞく

九月はじめになったら独立プロはいっせいに撮影にはいった。シネ・ユニモンド「女の性」新東宝「情死」青年芸術映画協会「ある愛の終りに……」大蔵映画「強烈な情事」センチュリー「熱い樹液」新日本映画「残虐の穴」など。相変わらずおさかんである。その中から二本の作品を取り上げることにした。「強烈な情事」（監督小川欽也）の箱根ロケ。「残虐の穴」（監督関孝二）は奥多摩の氷川へ……そのロケをルポしてみた。

強烈な情事

箱根ロケ

富士山をバックに箱根スカイラインをスポーツカーが疾走してくる。女性三人（扇町京子、橘桂子、美矢かおる）が車をおり、富士山をあおぎ、

「久しぶりね——三人そろうなんて……」

「学生時代に帰ってうんと楽しみましょうよ」

と、スラックス姿の女優さん達が、富士をバックに演技している。裸とは別なお色気がにじみ出ているのをみて、やはりお色気女優だなあと思った。どこの現場に行ってもいえることだが、ここでもちょうどバスの観光客がいて「テレビ映画の撮影ですか」と聞く。これは少ないスタッフで一人三役ぐらいの仕事をやっているし、そう見られるのだろう。

前の晩、大蔵山荘でリンチ場面や、裸のシーンの撮影が見られるかと期待?して行ったが、監督は大蔵映画ではセットを組めるし室内撮影はセットとのこと。

ピンク映画のセクシーシーンとは状況ががらりと変わって、スポーツカーと三人の女の談笑シーン、しかも美しい富士山をカメラにおさめて、夏の青空のような澄んだ撮影ぶりであった。

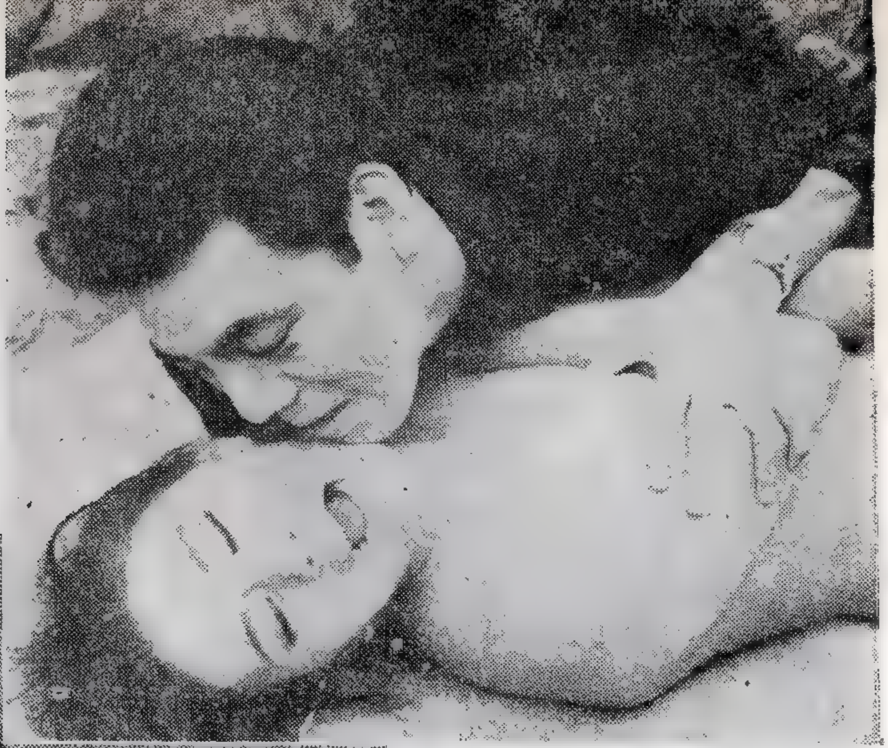
残虐の穴

奥多摩ロケ

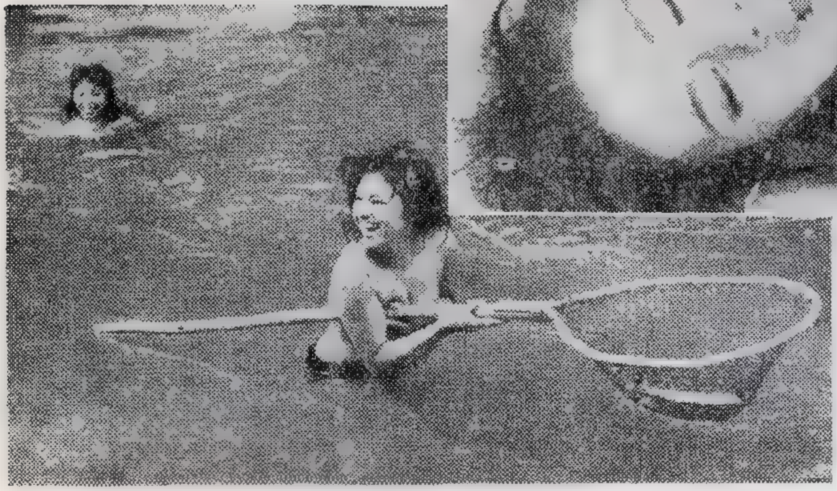
打合わせする小川監督と扇町京子

関孝二監督といえば、ピンク映画に先べんをつけた監督である。36年に「情欲の谷間」を撮り、翌年「情欲の洞窟」を撮り、国映のピンク映画路線のレールを敷いた、いわばエロダクションのパイオニア的な存在だ。

これまでの作品も「痴情の家」「鉄火芸者」「毒唇」といった作品がある。白髪をなびかせ、エネルギッシュに仕事をするあたり、やはりこの人のニオイが、強烈に発散する。最近は一カ月一本の割で監督をやっているが、若い若



▶「残虐の穴」で愛欲シーンをくりひろげる志摩あけみ



▶撮影の合い間にマス釣りに興ずる志摩あけみ（右）と橘桂子

松孝二監督とはいい勝負といったところ。

　こんどは「残虐の穴」を撮るというので、奥多摩の大沢渓谷のロケ現場に行ってみた。この映画、お話の方は徳川時代に御用金を運ぶ途中大判、小判の金を埋蔵している歴史的な秘密をめぐって、金と性の欲望のカットウを描こうというもの。

　氷川から入った大沢渓谷では、橘桂子、志摩はるみ、森まこ、それに男優陣も加わって、にぎやかな撮影である。

　グラマースターの志摩はるみは芸術祭不参加作品で話題をまいた「裸虫」の主演女優。前よりもかなり痩せたとはいえまだまだ「脂肪が多い感じ。その志摩が、冷たい渓流をカスリのパンティ一枚で泳いだり、マスをアミで採ったりする。自然で野性的な生活をとらえようというわけだ。

　渓流は物凄く冷たい。「体の感覚がなくなるわあ」といいながら出たり入ったり。女優も楽な商売じゃない。マスを採るシーンではオッパイ丸出し。大きなアミの中にマスを入れて、さもすくい上げたようにみせるのだが、彼女は自分のオッパイを丸出しにしているので、その方が気になってさまにならない。「オッパイ隠すことないよ、カッコウつかないよ」と関監督に数回ダメを出されて、どうやら、このシーンを撮り終えたのだった。

　一方、橘桂子もこれまたパンティ一枚で、その傍を泳ぐのだが、この方はいたって楽な姿勢である。

　パンツ一枚で演出する関監督、グラマーな志摩を並ばせるとなんとも〝残虐物語〟といわざるを得ない光景なのである。周囲ではマス釣りの人たちが、興味深くいや、ニヤニヤしながら糸をたれて眺めていた。

（ルポ・川島信子）

セクシー女優／シャワーの美学

セックス映画には女優のシャワーシーンがつきものである。わけても外国映画では、ボリューム豊かな女優が気持よさそうにシャワーを浴び、バスタオルをまいて出てきてベッドに横たわるシーンなど実に実にセクシーである。みている方が、そのベッドに飛び出して行き、抱擁してしまいたい欲望にかられてしまう。ヨーロッパでも、アメリカでもそんなシーンが出てくると、〝ヒュー〟という口笛や、喚声があがるそうだ。その点、日本は紳士です。

ところで、ピンク映画のシャワーシーンはどうか。一体シャワーはどんなときに使用するかとなると、ホテルや連れ込み旅館で、情事のあと女がかいた汗を流す描写に使っているのが主だ。ときにはその事前という場合もあるがその撮影現場も邦画五社の場合は、女優がパンティをはきときには水着まで着用におよび、防備おさおさおこたりない構えでやるのである。

南国娘らしい豊満な嘉手納清美

わけても緑魔子が「悪女」でみせたシャワーシーンなどは圧倒的に〝美しさ〟を表現して、これは拾いものであった。パンティーつつけず、カメラは彼女のバックをとらえる。もちろんお尻の割れ目もレキゼンである。そのお尻の割れ目のカッコよさが評判になって、緑魔子の魅力が高まったものだ。一昨年、団令子が恋人の恩地日出夫監督の「素晴しい悪女」で、乳首にバンソウコウをはって、シャワーシーンを撮ったが、ナンセンスであった。カメラが背中だけをとったのに「なんで前を気にするのかよ」といいたくなる。

その点、エロダクションの撮影風景などは実にさっぱりとして、勇ましく、割り切りがいい。あんまりいいので、果してそれでよかったのかと反問するほど。しかしこの撮影は誰でもみられるわけにはいかない。カメラマン、照明、監督、ホースでシャワーをかける助監督の四人ぐらいのもので、他は出入り禁止ということもある。

最近では「欲求不満」で葵真由美が、ホテルで情事のあ

緑魔子の素敵なヒップ

すっぽり裸になった葵真由美

と、シャワーをあびるシーンを撮ったが、パンティもいさぎよく脱ぎ、気持よさそうにお湯をあびるところをやってのけた。オヘソから上より撮らないのだからなにもパンティまでかなぐり捨てる必要ないじゃないか——と思えるのだが、そこはエロダクションのリアルさと意気込みの違うところ。流れるお湯がオヘソを伝わって、あとは書けないセクシー場面を現出したのであった。監督は「前がダメならバックで行こう」と、頭のテッペンから足元まで、カメラをタテ一に移動させて、葵の全裸を撮ったものだ。しかしこうなると度胸、割り切りのよさが、セクシー女優の最大の武器ということになるのである。

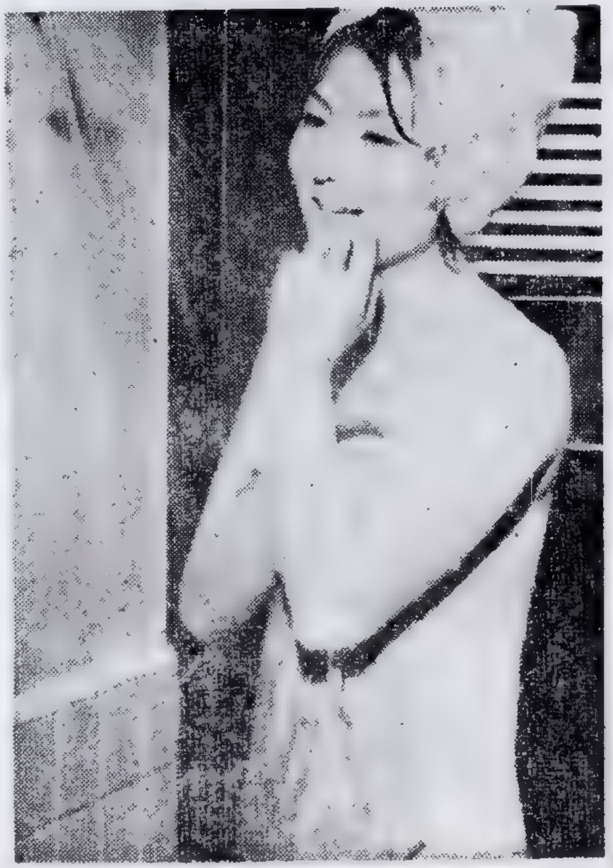
　シャワーシーンの美しさはどこにあるのか。まず、女の肌がお湯や水に濡れる、両腕と肩のふくらみ、やがて乳房の隆起にもかかり、女は解放感にひたってゆく、恍惚たる表情と光る女体、しかもときには黒い髪も濡れてゆき、女は一切のものをこのシャワーの一瞬に洗い流してゆく。まあざっとこんなムードを画面に表現してゆくのが、シャワーシーンのねらいなのではあるまいか。

　その辺を美しく、セクシーにとらえるのが演出の腕であり、女優の演技のみせどころなのである。演出する側からいわせれば、そこに余計なパンティや水着があっては、せっかくのセクシーシーンも型なしである。せいぜい目のさめるようなシャワーシーンを大いに描いてほしいものだ。

　入浴シーンが多いわりにシャワーシーンがないのは、女優のプロポーションをとらえにくいためだろう。しかし、胸より上しかとらない入浴シーンより、ふりそそぐお湯とオッパイとの対決にはこの上ないエロティシズムがある。

　しかし、数えあげてみればエロダクション作品にはなんとシャワーシーンの少ないことか。セックスシーンにはもっとも関連深いというのに。せいぜい画面の上でも清潔なシーンをとり入れてほしいものだ。

「しとやかな獣」の浜田ゆう子



●ピンク映画通信

"成人映画"をめぐって……

映画評論家の岩崎昶氏が、「**朝日ジャーナル**」(九月二〇日号)で、「映画は救えるか？」〈斜陽化・分極化からの脱出〉を書いているが、その中で本誌「成人映画」についてつぎのようにのべている。

「ピンク・チェーンの映画館で、私は金一〇〇円也を投じて"成人映画"という月刊パンフレットを買った。カラーや黒白のグラビアで、ピンク・スターたちのヌードやセミ・ヌードのスチルを入れた、なかなかきれいな雑誌である。五社が不景気といいながら、宣伝機関誌一つ出そうとしない無気力ぶりにくらべて、ピンクチェーンの新興の意気に燃えた積極政策には、正直のところうたれた」

岩崎氏に一言説明申上げたいのは、「成人映画」はピンク・チェーンの宣伝機関誌でもなければ、ピンク・チェーンの営業政策の代行雑誌でもないということ。あくまでも自主的な立場で、一連のピンク映画や、洋、邦画のスクリーン・エロティシズムを紹介してゆくのが目的なのである。

もう一つ、「**日刊スポーツ紙**」の"談話室"でもつぎのように「成人映画」の記事をのせていた。

「▼"成人映画"制度をしいている映倫が、"成人映画"の好評で当惑している。といっても、これは雑誌「成人映画」の話。つまり最近発行された同名雑誌が、オトナどもの間で話題となっていることから起ったお話というわけ。(省略)▼発売以来、一館あたり、一週間に百部から百二、三十部も売れているというから恐れ入る。▼映倫が当惑しているのは雑誌名がズバリ「成人映画」ということ映倫指定作品の表示と全く同じことによる世論への心配。この字句を使用してはならぬとの規制がないため、痛しかゆしというところ。雑誌側は「映画のプレイボーイ誌です」と意気盛ん。はてこの雑誌どこまでのびるか……」

そこで、映倫さんに申上げたいことは、「成人映画」の字句は使用してはいけないという規制がない。成人向映画のポスターにも"成人映画"の字句がみられるし、本誌も、成人向映画のための成人映画を紹介するのが、狙いなだけに、なんら異論の余地はないと思う。"世論への心配"も本誌は"十八才未満お断り"の映画館でしか、売っていないし、心配はまったくご無用ですといいたい。はてこの雑誌どこまで伸びるか……というわけだが、その方は出足もいいので、それこそはてどこまで伸びるかという次第だ。

♥新高恵子

ヨランダ・モディオ

♥"ゴールデンハンター"の女たち

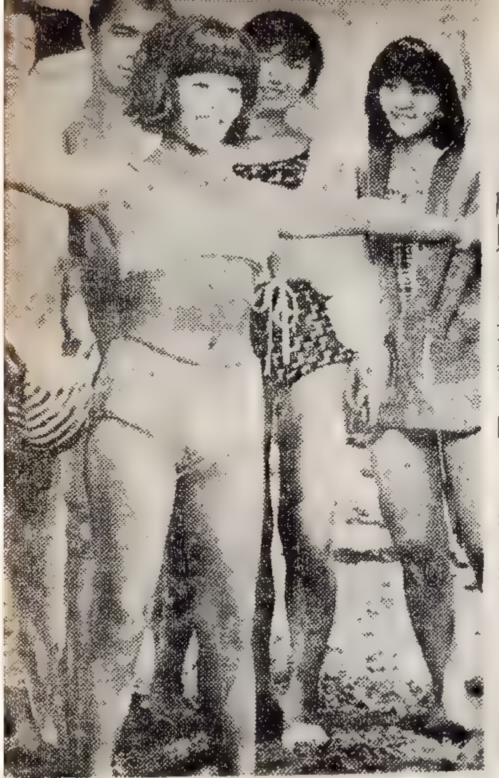
文・若松孝二
カメラ・本誌特写

新高恵子君は現代の若いバイタリティをもっている。根性もあるし、演技のとり組み方も真剣にやっているのはいい。ボクの「歪んだ関係」ではかなりたたいたが、心配なのはあまり、いろんな作品に出過ぎることだ。いまが一番大切なときだし、もっと作品を選んで、自分にプラスになる仕事をしてほしい。彼女のハダカは美しいし、魅力もある。が、衣服をまとうとそれが半減してしまうのだ。もっと女優らしい魅力を発散させてほしい。

マーガレット・リー

■ヘラルド提供

☆今月のスクリーン・エロティシズム



・十代の呻吟（うめき）

十代の呻吟

成熟した肉体にもだえる若い性の反抗！

少女期から女へ成熟する若い性の断層を描いたもの。無感動なセックス、強烈なリンチ、若さあふれる十代のありあまったエネルギー、こうしたものの交錯する世代。こうした矛盾と生命のはかなさを腐敗した社会に叩きつけた、いわゆる十代の反抗映画。

監督は新人の梅沢薫。牧和子が友情出演している。

快楽

脱獄囚の黒い欲望と人間性の追究！

手錠につながれたまま脱獄した、二人の殺人犯を主人公に、追いつめられた人間がもつ黒い欲望と、そうした者の心にもあるひとかけらのヒューマニズムを追究しようとする異色作品。人間がとことん行きづまったとき、果してなににすがって生きてゆくか、手錠のままの暴力行為を描いている。監督は糸文弘。

愛欲の叫び

転落する男女の不幸な愛欲をつづる哀話

三年前、みゆき（泉ゆり）は、ふとしたことから二人組の不良に乱暴されたが、ちょうど来あわせた男に助けられた。しかし、男は誤って一人を殺して刑務所に入るが、刑期を終えて再会してみると、女はコールガールに転落していた。不幸な男女の愛欲をリアルなタッチで描いている。監督は高野平。

紅壺

肉体を賭けて虚名にあこがれた女の哀愁

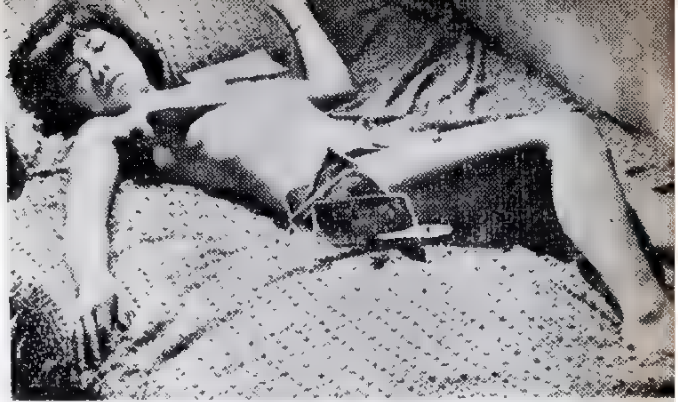
ファッション・モデルを志望する弘子（真山ひとみ）は自分を売り出すためには、どんな犠牲をもいとわないという女だった。あるときはどん欲に他人を利用し、またあるときは虚名をつかむために肉体までも提供した。しかしその結果得たものは――。しかも乱脈な生活は、真実の愛の価値をも見失ってしまう女にしてしまった。十七才の無軌道な女の姿を描いている。監督は渡辺護。

・紅　壺

歪んだ関係

灰色の情事の側面と看護婦が企んだ殺人

産婦人科医院の夫人（城山路子）はある学生と通じ、情事にふけっていることを知った看護婦（新高恵子）が、院長夫人におさまろうとして、夫人を殺害するという、これまでにない異色な手口を使う。殺人材料は〝精液〟。これもまたオール・セックス・エロティック・ミステリー。監督若松孝二。



・裸の世代

裸の世代

悩める若者と暗黒の世界の泥海の交叉！

上流家庭に育ち、日ごと夜ごと遊びにばかりふけっている若者たち。だが彼らも、その一連の行動の中から、なにかを探し出そうとしてあせっている。こうした悩める若者たちの生態に、都会議員選挙の暗黒面をからませた思春期映画。十代スターが若さを画面いっぱいにぶつけている。

監督は月森功。

狂った本能

大人のみにくさを知った少女の不信！

高校三年生の美樹（坂樹まゆみ）が人生に背をむけたのには、こんな理由があった。ある日学校帰りに三人の不良に処女を奪われ、さらに信じていた母（若杉嘉津子）の情事をかい間見、大人の世界に不信感を抱くようになったからである。体を張って短かい人生を終る青春のエレジー。

監督は経堂一郎。

青い悦楽

悦楽を求めた二人の女とその末路…！

絹子（露原悦子）と弘子（高月詢子）の二人は、単調な日々の仕事にあき、享楽の世界にはかない夢を追うようになる。コールガールを気取って男を探し求める彼女たち。だが二人の前に現われた悦楽とは狼の足下にくみしかれたみじめな餌食の姿だけであった。

監督は朝岡忠。

・青い悦楽

四つの乳房

富と虚栄にふみにじられた双生児姉妹！

富と虚栄の重圧に、灰色の青春をおくらねばならなかった双生児姉妹の悲劇が描かれている。妹には恋人ができ、行方をくらませてしまった。そこで心配した姉は妹を探しまわるが、発見したときには妹は、すでに男に殺されていた。新高恵子が藤田恵子の芸名で二役を演じている。

監督は三樹英樹。

乳ぼくろ

男殺しの乳ぼくろが生んだヤクザの悲劇

暴力のきびしい取締りによって、街のダニとよばれる連中の組織は、次々に解散されていった。しかしヤクザのアカがしみついた黒

独立チェーン 十月番組

▲九月四一週（9月21—27）「愛欲の叫び」（東京企画）「快楽」（センチュリー）

▲一週（9月28—10月4）「歪んだ関係」（国映）「蜜戯」（国映）

▲二週（5—11）「女の林」（新東宝）「情死」（新東宝）

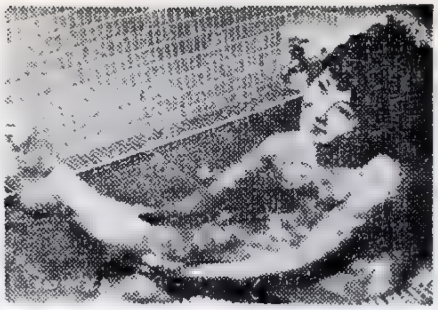
▲三週（12—18）「熱い樹液」（センチュリー）「紅壷」（センチュリー）

▲四週（19—26）「女高生の日記」（東京企画）「肉の歓び」（東京企画）

▲十一月一週（26—11月1）「処女の反撥」（センチュリー）「赤いしたたり」（国映）

OPチェーン 十月番組

▲九月四週（9月21—27）「処女無残」（東



四つの乳房

連隊には、やっとやどった美しい純愛も、殺人というういまわしい行為のためにふみにじられてしまう。内田高子の乳房のホクロは男殺し、監督は糸文弘。

素肌の叫び

コールガールの企んだリンチの報復！

人里はなれ、潮の香もなまなましい漁村での、素っ裸の人間のぶっつかりをリアルに描いた作品。

東京から帰ってきたコールガールの女（谷口朱里）が高校生をもてあそんでしまう。その代償は村人たちの目をおおうような残忍なリンチ。だが、それは女の憎い男への報復だったのである。

監督は星名雅人。

憎い肌

金か心か……女心をハカリにかける男！

かつて自分と関係のあった四人の女を次々と訪ねて行くが、いずれも冷酷に「金がすべてよ」と突きはなされてゆく男心を描いている。人の心が大切か、金が大切か。競輪で得た大金で女心をたしかめてゆく男の姿とそれに向う女の姿を描いている。

監督は藤田尚。

痴情の密漁

女子大生をめぐる男たちと乱脈な性！

母親が若い男と駆けおちしたため、男手ひとつで成長した女子大生（美矢かおる）はヤクザと関係してしまう。そしてそのヤクザから逃れるために田舎に身をかくすが、そこで若い衆とできてしまう。さらに東京からはヤクザが追ってきたりして、静かだった漁村が奔放な性の村となってしまう。

監督は小川欣也。

・素肌の叫び

女の性（さが）

女のはてしない愛と性のうづきと悶え！

大学教授の妻（城山路子）が夫とのセックスでは満足できず、自動車教習所で知り合った男によって、はじめて女としての愛情と性にめざめてゆく。かくて女の果てしない愛と性のうづきに、日ごと夜ごと彼女は悶える。このところ売り出しの城山がセクシーさをいっぱいに発散している異色作。

監督は高木丈夫。

洋プロ）「野郎と牝犬」（日本シネマ）「炎の子」（関東ムービー）

▲一週（9月28—10月4）「青い悦楽」（大蔵）「白昼の暴漢」（東京三映社）「裸女山脈」（関東映配）

▲二週（5—11）「女の性」（明光セレクト）「蜜のおとし穴」（日本シネマ）

▲三週（12—18）「灰色の悶え」（関東ムービー）「肉体の報酬」（葵映画）

▲四週（19—25）「このまま殺して」（大蔵）「生理の掟」（ヒロキ映画）

★

輸プロ（社長佐藤重夫氏）の製作状況は九月中旬「尼寺の狩」（監督向井寛、主演内田高子）「銭と女」「浮気合戦」十月に「売春残酷物語」を製作する。

♥クローズ・アップ①

扇町京子

ズベ公やパンプ役で、こぼれるばかりのお色気をスクリーンいっぱいに、ふりまいている。はじめて会ってびっくりした。画面での強烈な印象とは違って実物はしとやかなお嬢さんといった感じ。

「私ってバンプ役が多いでしょ。だから本物もすごくドライな女性じゃないかと誤解されるんですよ」

新東宝に入ったのが六年前新東宝時代の代表作は小森白監督「激闘の地平線」。そのころすでに新東宝は製作中止という非常事態になり、彼女もスクリーンから遠ざかろうと決意したこともあった。その後、大蔵映画作品で当時上映禁止問題で話題になった、「肉体の市場」（小林悟監督）でカムバックした。新東宝から大蔵映画に移籍したわけだが、会社こそ違え、社長が同じ大蔵貢氏。

「一時は毎週私の出演作品が上映されて、ショックを感じ仕事を休んだこともあったのよ」

「〃大蔵映画〃とはきょ年の八月で契約が切れたけど、いままで、月給をもらっていたのが急になくなってしまい淋しいわ。でもこんどの〃強烈な情事〃にしても昔の新東宝の人たちばかりだし、すごくたのしいわ」と伏し目がちに語る。

「もうあたしも年でしょ。いい相手がいたら結婚したいと思うわ」とホンネを吐いた。

「別に職業は問わないの。映画界の人じゃなければ……とか、サラリーマンじゃなくちゃイヤとかいう人がいるけどやっぱり、人物本位だと思うわ。ちょっといい人だなあーと思い付き合っても、周囲からその人の悪い噂を少しでも聞かされると、すぐイヤになってしまうの。私って……あきらめが早いのか、あきっぽいのかわからないんです」

いやいや、そんなことはない。セクシー映画のエース級の今日あるのも女の一匹狼、マネージャーもおかず、プロダクションに属さず、自分ひとりで仕事を選んでゆくバイタリティがあるからこそと思う。

独立プロの映画では一作で消えてしまう女優が多い昨今息の長い女優でいられるのはそうした点が原因だろう。これからも大いにハッスルして若さとセクシーな魅力を画面一ぱい発散させてほしいものだ。そして演技力の広がりも期待したい。（川島）

★愛知県豊橋市出身、昭和十五年十一月生まれ。新宿コマ・ダンシングチームに入団、その後新東宝ニューフェイスとなる。現在はフリーで大蔵映画「強烈な情事」に出演中。「東京都北多摩郡狛江町戸一三一・九）

ピンク映画みたまま

「黒い雪」の事件以来映倫や警視庁のうるさ方は、〃あのオッパイの出ているところは切れ！〃とか〃あのベッド・シーンはアカン！〃とか、大変やかましくなって来ていますが、それでも、まだまだおピンク映画はわれわれ男性のために健斗してくれているようです。

♣

今月の私の推選スターは桂奈美さん――「**漁色**」の彼女はほんとによかった。岩蔭で海女の衣をパラリとぬぎ捨てて、フンドシ姿？になった時「ああ！」と嘆声をあげたのは私だけであったろうか。あの細いしなやかな身体に似合わず、その胸の豊かさに、私はおどろいた。

あとで知ったのだが、この映画に出る前に、もうすでに「漫画読本」のピン・アップのモデルをやったり日劇ミュージック・ホールに出ていたそうだが、フェースはいいしまず、独立チェーン近来の掘りだしものではないか。

この「漁色」という映画――旅館の女中だった桂奈美が宿屋の主人に犯されて、そこにいられなくなり、ある港の一杯呑み屋で働いているとそこに若い船員がやって来てお互いが惚れ合う、が、結局は結ばれないという悲恋ものがたり。桂奈美が旅館の広い浴槽で、主人に裸のまま抱かれるところなどは、グアーンと来ましたヨ。

♣

「絶倫」の橘桂子

「**招かれざる指**」は女肌シリーズと銘うったミステリーもので、死んだ娘さんの復讐のために姉と称する女性が乗りこんで、その一家をメチャメチャにするハナシ。私は旅館の女中という設定よりも、オサゲ姿の良家のお手伝いさんが一家の主人や息子たちと関係してしまう乱交場面、仲々にドラマの必然性があって、いいと思った。とくにお手伝いになる阿木正美は、往年の久我美子の処女の感じがただよっており、ソファーに横にされ、チャックを徐々にはずされて荒々しい呼吸になってゆくあたりは、監督遠藤実美夫もよくやっていると思った。ベッド・シーンは、ただ荒っぽいだけでなく、男と女が次第にエクスタシーに溶けこんでゆくように、丹念にとって欲しいもの。

♣

新東宝の「**絶倫**」は題名と内容がそぐわず、なにが〃絶倫〃なのか、さっぱりわからないが、プールの中で紙の水着が水に溶けて、可愛い美人サンたちが、素ッ裸になって大いにローバイするところはアイデアとして買える。小森白監督はさすが、大手筋で映画を作っただけあって、喜劇調ですすめて途中「日本拷問刑罰史」の名残りのように凄くサディズムに凝るなど、あの手この手で見せている。橘桂子はとても海女には見えないシンナリした身体つきだが、このひとのファンもだんだん増えてゆくことだろう。

（佐藤重臣）

「招かれざる指」の阿木正美

いまや売れっ子スターの内田高子が、こんどは内田プロを設立して映画を製作するという。スターからプロデューサーとなかなかの活躍ぶりだが、その第一回作品が、フランク永井の主題歌「港神戸の夜霧の女」。来年早々クランクインの予定だが、もちろん内田本人が出演し、〝夜霧の女〟をやる。

監督は未定だが、配給は日活をねらっている。

★

近代映協、新藤兼人監督の「悪党」でもっともエロチシズムのあるシーンは、岸田今日子の入浴シーン。ザンブと入るのではなく、古代の貴族の風呂の入り方で行こうーと「東西沐浴史」や時代考証に従って、行なわれた。彼女の体を露わに見せず、髪、首、肩、胸、足と二十カットにわたってモンタージュ式にとった。さてどんな真の健康的な美しさが表現されたか。それにしても〝腰〟の部分がないのはウルサイからですかね。

賑わった撮影会

★

ピンク映画女優の水着撮影会が、この夏千葉県勝山海岸で行なわれた。テアトル三原橋、センチュリー映画が主催で、新聞、雑誌のカメラマン約二十名を集めて、にぎやかな撮影会となった。女優は「漁色」の南たまき、桝田邦子、ほかに西川実樹、皆川和子、山本裕子の五人。お色気が売りものなだけにいずれおとらぬグラマーぶり。それもビキニスタイルは面倒とばかり、乳房を出してポーズをとる〝セクシー撮影会〟となった。

なかには「オッパイだけではものたりないよ」というカメラマンが女優をくどいて、全裸撮影までやってのけたサムライもいた。主催者は「ピンク映画の威力はいかがなもので……」とゴキゲンであった。

★

大島渚監督の「悦楽」が大ヒット。深夜興行で一万二千余の観客を集めた。「悦楽」と「血の掟」の番組がよかったのか、松竹の興収新記録を樹立した。〝エロとやくざ〟の強さを立証したわけだが、大島監督がすぐさま次回作の準備にとりかかっている。「もう一度セックスをテーマにしたもの。〝恍惚〟〝陶酔〟と続けてセックス三部作にしょうというプランだが、もう一つは安藤昇氏（〝血と掟〟の主演）を主役にしてのアクションも考えているそうだ。さて柳の下にドジョウは二匹いるかどうか。

「悦楽」の八木昌子と中村賀津雄

★

片や「血と掟」の湯浅浪男監督もこんどのヒットで「ヤサぐれの掟」（松竹配給・CAG提携製作）の撮影をはじめた。第7グループの第一回作品「熱いうめき」で三百万円映画を撮り、これまで十本の作品をとった湯浅監督「もうセックス映画はやりません！」はハナ息が荒い。

そのときマバタキしないで

★日本の映倫もかなりヤカましいが、ソレ以上にうるさいのがアメリカだ。とにかくおヘソをうつしてはいかんというくらいのもので、そのホカの場所などは、もってのほかだ。そうやってプロダクションコードがキビしい上に、圧力団体（?）がたえず目を光らせている。日本流にいえばおシャモジを右手に、左手に十字架（あるいはその逆かナ）を高々と捧げたオバさんたちが、にらみをきかせている。

「泥棒を消せ」のA・マーグレット

★ソレでも、まア、最近はテレビの圧力からのがれるという意味もあって、倫理規定の網の目も、ちょっぴりひろがったようだが、日本へ来るアメリカ映画には、ぜったいといっていいくらい〝掘り出しもの〟はないと思って差しつかえない。

★しかし、なにせ、ナマ味の人間のやること。完璧な陣ぞなえなどありはしない。例えば、このアン・マーグレット嬢のスチール写真のごときである。この写真はMGMの「**泥棒は消せ**」のスチール写真だが、自動車の免許証がとれるホドの視力、もしくはメガネをかければ、新聞ぐらいは読むことの出来る人（読めなくても活字が見えればいいよ）なら、「ハッ」と気がつくはずである。

★アン・マーグレットといえば、最近、TV映画「セブンティセブン・サンセット」のロジャー・ナニがし氏と結婚したの、ユビワの交換だけでまだ式の方はあげておらんだのとコウロンオッパク、ファンをヤキモキさせている、ハリウッドで目下大スペシアル・セール中の中堅女優だが、ソレのコンナ写真がはるばる太平洋をこえたミズホの国でおがめるとは……ね。

★こういう例を見ると、アン・マーグレットの次回作「**シンシナティ・キッド**」の公開がぐっと楽しみになってくるネ。ロジャー・ナニガシ君とツキ合ってからのアン・マーグレットはぐっと大人っぽくかつ成人映画っぽく（この言葉流行らないかなア）なっているので、カッコイイ野郎ことスチーブ・マックィーンとのベッド・シーンが、如何があいなっているか楽しみだ。

★何故、こういうタグイの写真が、何人かの人の目をくぐって、日本へ潜入するを得たか、不思議でならないが、察するにアン・マーグレットという女優さんは、気持ちのとても大らかな、あけっぴろげな性質の人だと思うのだ。それでなくては、当然、気がつくハズではないか。

★とにかく、この写真を見た人は、きっとアン・マーグレットのファンになるにちがいない。ファンにならずとも親近感は、おぼえるにちがいない。映倫のうるさいアメリカだって、こういうことがチョイチョイある。だから、われわれとしては、マバタキも出来ないのである。マーグレットさん、ごめんなさい。

（和田正夫）

「シンシナティキッド」より

「成人映画」友の会へのお誘い

あなたも友の会にお入りになりませんか。今日からあなたもプレイボーイの仲間入り。友の会ご入会の方にはいろいろな特典を用意してあります。

■一年分予約の方に年3回特別試写会招待。

■スターとの交歓会。ほか……

■ご入会になるには下記の入会申込用紙に入会金百円と会費をそえて、東京都中央区銀座東六の四　村木ビル五階　**現代工房**「成人映画」友の会までお送り下さい。

入会申込書

氏名	（　　才）
住所	
職業	
会費	半年分（〒共）¥　600
	一年分（〒共）¥1,000

編集後記

★〝石の上にも三年〟という言葉がある。〝三日、三月、三年〟という言葉もある。何事につけ〝三〟という言葉は、ひとつの区切りをつける際にポイントになる言葉であるらしい。そしてわれらが「成人映画」も、お蔭さまで第三号をおくりだすまでに成長した。ただやみくもにここまでつっぱしってきたが、これでどうやらちゃんとしたレールがしけたように思える。といってもこれからが本格的活動期[illegible]。大いに頑張ります。（E）

★大島渚監督が「日本読書新聞」（9/13日号）に「映倫は映画会社の自立規制機関である。映画作家、映画技術者の代表によって映倫委員を構成すべきだ」とのべている。映倫カットによって「悦楽」は傷だらけになった。大島監督だけを矢おもてに立ててはいけない。監督協会、シナリオ作協もマスコミもこぞって表現の自由を守る運動をこの際押しすすめるべきだ。（K）

★このところ各新聞、雑誌、週刊誌を開くと、エロダクションの記事が目につく。映画界の新勢力にマスコミが目を注ぐのは当然だが、作家を動員して書かせたルポ記事が興味深いので、特集してみた。今後も〝新しい現象面〟を積極的にクローズアップさせてゆきたい。

やっと三号目にこぎつけたが、これからが勝負のしどころである。「やったなッ！」と思えるニクイ奴をお目にかけたい。それとやなせ・たかし先生にはいつも積極的なご協力をいただき、感謝のほかかない。（M）

●月刊「成人映画」10月号　昭和40年10月1日発行　☆本誌毎月1回1日発行
定価100円　■編集兼発行人／川島信子
発行所／東京都中央区銀座東6の4　村木ビル5階　現代工房　電話（541）3798

♥今月のスクリーン・エロティシズム

▼十代の呻吟（うめき）（国映）

奈加公子

★詳しい内容紹介は23ページ

▼絶倫（新東宝）　橘桂子

▼快楽（センチュリー）　桜道代

▼花と蛇（東京企画）　紫千鶴

◀紅壷（センチュリー）真山ひとみ

▶愛欲の叫び（東京企画）泉ゆり

◀紅壷（センチュリー）真山ひとみ

◀招かれざる指（センチュリー）阿木正美

▼歪んだ関係（国映）

城山路子

祝■独立チェーン大好評!!

新東宝株式会社
社長 並木謹也
東京都中央区京橋二―七篠原ビル
TEL（五六七）〇九九一―四

国映株式会社
社長 矢元照雄
東京都中央区銀座西八―十
高速道路ビル
TEL（五七一）八八七三

センチュリー映画社
社長 井上猛夫
東京都中央区銀座四―一
三和銀行ビル四階
TEL（五八三）〇五七六

東京企画
社長 三田浩
東京都渋谷区円山町九
TEL（四六一）六九七一

独立チェーン ■全館完全冷房

劇場	電話
歌舞伎町 新宿座	(368) 4338
上野セントラル	(831) 3136
テアトル三原橋	(561) 4058
ヤエススター座	(210) 5081
池袋名画座	(982) 6104
板橋ピース	(961) 2222
蒲田南星座	(731) 2526
川崎セントラル	(川崎3) 2971
横浜グリーンホール	(横浜68) 0351

計画された完全犯罪！しかし真犯人は？・だけが知っていた!!

歪んだ関係

監督●若松孝二

撮影●伊東英男

城山路子
新高恵子
林孝一

製作／矢元照雄

国映株式会社

国映

10月1週独立チェーン大公開

同時封切■〈蜜戯〉

月刊「成人映画」十月号　昭和40年10月1日発行　編集兼発行人／川島信子　発行所／東京都中央区銀座東八の四村木ビル五階　電話（五四一）三七九八　現代工房　定価百円